

日蓮大聖人御書全集

やくおうほんとかくいししょう

薬王品得意抄

新版
524
ゝ
531

やくおうほんとかいしよう
薬王品得意抄

ぶんえい ねん
文永2年('65)
44 さい
歳

やくおうほん

たいい

やくおうほん

だいしち

かん

この薬王品の大意とは、この薬王品は、第七の巻、

にじゅうはつぽん

なか

だいにじゅうさん

ほん

だいいち

かん

二十八品の中には第二十三の品なり。この第一の巻に

じよほん

ほうべんぽん

にほんあ

じよほん

にじゅうはつぽん

じよ

ほうべんぽん

序品・方便品の二品有り。序品は二十八品の序なり。方便品

にんきほん

いた

はつぽん

しょう

にじようさぶつ

あ

より人記品に至るまでの八品は、正には二乗作仏を明かし、

ぼう

ぼさつ

ぼんぷ

さぶつ

あ

ほつし

ほうとう

だいば

かんじ

傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす。法師・宝塔・提婆・勸持・

あんらく

ごほん

かみ

はつぽん

まつだい

ぼんぷ

しゆぎよう

よう

と

安楽の五品は、上の八品を末代の凡夫の修行すべき様を説

ゆじゆつぽん

じゆりようほん

じよ

ふんべつくどくほん

くなり。また涌出品は寿量品の序なり。分別功德品より

じゆうにほん

しょう

じゅうりようほん

まつだい

ほんぷ

ぎよう

よう

十二品は、正には寿量品を末代の凡夫の行すべき様を、

ぼう

ほうべんほんとう

はつぽん

しゅぎよう

よう

と

傍には方便品等の八品を修行すべき様を説くなり。しかれ

やくおうほん

ほうべんほんとう

はつぽん

じゅうりようほん

しゅぎよう

ば、この薬王品は、方便品等の八品ならびに寿量品を修行

よう

と

ほん

すべき様を説きし品なり。

ほん

じゅう

たと

あ

だいいち

たいかい

たと

この品に十の喩え有り。第一は大海の譬えなり。まず

だいいち

たと

もう

なんえんぶだい

にせんごひやく

かわ

第一の譬えをほぼ申すべし。この南閻浮提に二千五百の河

さいくやに

ごせん

かわ

そう

してんげ

にまん

あり、西俱耶尼に五千の河あり、総じてこの四天下に二万

ごせんくひやく

かわ

しじゅうりないしひやくり

いちり

いっちよう

五千九百の河あり。あるいは四十里乃至百里・一里・一町・

ひとひろとう

かわ

あ

しよが

そう

一尋等の河これ有り。しかりといえども、この諸河は総じ

しんせん

たいかい

およ

ほっけいぜん

けこんぎよう

あこんぎよう

て深淺のこと大海に及ばず。

法華已前の華嚴經・阿含經・

ほうどうきよう

はんにやきよう

じんみつきよう

あみだきよう

ねはんぎよう

だいにちきよう

方等經・般若經・深密經・阿弥陀經・涅槃經・大日經・

こんごうちようきよう

そしつじきよう

みつこんぎようとう

しやかによらい

と

金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦如来の説くところ

いっさいきよう

だいにちによらい

と

いっさいきよう

あみだによらい

の一切經、大日如来の説くところの一切經、阿弥陀如来の

と

いっさいきよう

やくしによらい

と

いっさいきよう

説くところの一切經、薬師如来の説くところの一切經、

かこ

げんざい

みらい

さんぜしよぶつ

と

いっさいきよう

なか

過去・現在・未来の三世諸仏の説くところの一切經の中に、

ほけきようだいいち

たと

しよきよう

たいが

ちゆうが

しやうがとう

法華經第一なり。譬えば、諸經は大河・中河・小河等のご

ほけきよう

たいかい

とう

と

とし、法華經は大海のごとし等と説くなり。

かわ

すぐ

たいかい

じゆう

とくあ

いち

たいかい

ぜんじ

ふか

河に勝れて、大海に十の徳有り。一に大海は漸次に深し、

かわ

に

たいかい

しし

とど

かわ

さん

河はしからず。二に大海は死屍を留めず、河はしからず。三

たいかい

もと

みようじ

うしな

かわ

し

たいかい

いちみ

に大海は本の名字を失う、河はしからず。四に大海は一味

かわ

ご

たいかい

たからとうあ

かわ

なり、河はしからず。五に大海は宝等有り、河はしからず。

ろく

たいかい

きわ

ふか

かわ

しち

たいかい

こうだいむりよう

六に大海は極めて深し、河はしからず。七に大海は広大無量

かわ

はち

たいかい

だいしん

しゅじようとうあ

かわ

なり、河はしからず。八に大海は大身の衆生等有り、河は

く

たいかい

しお

ぞうげんあ

かわ

じゅう

しからず。九に大海は潮の増減有り、河はしからず。十に

たいかい

おおあめ

たいが

う

えいいつな

かわ

大海は大雨・大河を受けて盈溢無し、河はしからず。

ほけきよう

じゅう

とくあ

しよきよう

じゅう

とがあ

この法華経には十の徳有り。諸経には十の失有り。こ

きよう

ぜんじじんた

ごじつてんでん

しよきよう

いち

の経は漸次深多にして五十展転なり。諸経にはなお一も

な

に

さん

しないしごじつてんでん

かわ

ふか

無し、いわんや、二・三・四乃至五十展転をや。河は深け

たいかい

あさ

およ

しよきよう

いちじ

いづく

じゆうねんとう

れども大海の浅きに及ばず。諸経は、一字・一句・十念等

じゆうあくごぎやくとう

あつき

おさ

いちじ

をもつて十悪五逆等の悪機を撰むといえども、いまだ一字

いづく

ずいきごじつてんでん

およ

きよう

たいかい

一句の随喜五十展転には及ばざるなり。この経の大海は

しし

とど

ほけきよう

そむ

ほうぼう

もの

ごくぜん

ひと

死屍を留めずとは、法華経に背く謗法の者は、極善の人な

す

あくにん

りといえども、なおこれを捨つ。いかにいわんや、悪人な

うえ

ほうぼう

もの

しよきよう

ぼう

るの上、謗法をなさん者をや。たとい諸経を謗ずといえど

ほけきよう

そむ

かなら

ぶつどう

じよう

いつさいきよう

も、法華経に背かざれば必ず仏道を成ず。たとい一切経

しん

ほけきよう

そむ

かなら

あ

びだいじよう

お

を信ずといえども、法華経に背かば、必ず阿鼻大城に墮つ。

ないし だいはち たいかい だいしん しゅじょうとう

乃至、第八に大海は大身の衆生等ありというは、大海に

まかつだいぎよう だいしん しゅじょう あ むけんじごく もう

は摩竭大魚等、大身の衆生これ有り。無間地獄と申すは

じゅうこうはちまんゆじゆん もの むけんじごく お いちにん

縦広八万由旬なり。五逆の者、無間地獄に堕ちては一人に

かなら じゅうまん じごく しゅじょう もの だいしん しゅじょう

て必ず充滿す。この地獄の衆生は五逆の者、大身の衆生

しよきよう しょうが たいが なか まかつだいぎよ な ほけきよう

なり。諸経の小河・大河の中には摩竭大魚これ無し。法華経

たいかい あ ろくぎやく もの ぶつどう じよう じつ

の大海にはこれ有り。五逆の者、仏道を成ず。これ実には

しよきよう な しよきよう あ い じつ

諸経にこれ無し。諸経にこれ有りと云うといえども、実に

みけんしんじつ ゆえ いちだいしろうぎよう そら てんだいちしゃ

は「未顕真実」なり。故に、一代聖教を諳んぜし天台智者

だいし しやく い たきよう ぼさつ き にじよう

大師、釈して云わく「他経は、ただ菩薩にのみ記して二乗

に記せず。き ぜん き なく き ないしこんきよう みなきただ善にのみ記して悪に記せず乃至今経は皆記す」等云々。とううんぬん よ りやく余はしばらくこれを略す。

第二には山に譬う。だいに やま たと じつぼうせんとう やま なか しゅみせんだいいち十宝山等とは、山の中には須弥山第一

なり。じつぼうせん いち せつせん に こうせん さん かりらせん十宝山とは、一には雪山、二には香山、三には軻梨羅山、

四には仙聖山、五には由乾陀山、六には馬耳山、七には

尼民陀羅山、八には斫伽羅山、九には宿慧山、十には須弥山

なり。さき くせん しよきようしよせん いちいち たから先の九山とは諸経諸山のごとし。ただし、一々に財

あり。しゅみせん しゅぎい ぐ たから すぐ れい須弥山は衆財を具して、その財に勝れたり。例せば、

世間の金の閻浮檀金に及ばざるがごとし。せけん こがね えんぶだんごん およ けこんぎよう ほっかい華嚴經の法界

唯心、般若の十八空、大日經の五相成身、觀經の往生

より、法華經の即身成仏勝れたるなり。

須弥山は金色なり。一切の牛馬・人天・衆鳥等、この山

に依れば、必ず本の色を失つて金色なり。余山はしから

ず。一切の諸經は法華經に依れば本の色を失う。例せば、

黒色の物の日月の光に値えば色を失うがごとし。諸經

の往生・成仏等の色は、法華經に値えば必ずその義を無

う。

第三には月に譬う。衆星は、あるいは半里、あるいは一里、

はちり

じゅうろくり

す

つき

はつぴやくより

あるいは八里、あるいは十六里には過ぎず。月は八百余里な

しゅしよう

ひかり あ

つき

およ

り。衆星は光有りといえども、月に及ばず。たとい

ひやくせんまんおくないしいちしてんげ

さんぜんだいせん

じつほうせかい

しゅしよう

百千万億乃至一四天下・三千大千・十方世界の衆星これ

あつ

ひと

つき

ひかり

およ

ひと

を集むとも、一つの月の光に及ばず。いかにいわんや、一

ほし

つき

ひかり

およ

けこんぎよう

あこんぎよう

ほうどう

はんにや

つの星、月の光に及ぶべきや。華嚴経・阿含経・方等・般若・

ねはんぎよう

だいにちきよう

かんぎようとう

いつさい

きよう

あつ

涅槃経・大日経・観経等の一切の経これを集むとも、

ほけきよう

いちじ

およ

法華経の一字に及ばざらん。

いつさいしゅじよう

しんちゆう

けんじ

じんじや

むみよう

さんわく

一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑ならびに

じゆうあくごぎやくとう

ごう

あんや

けこんぎようとう

いつさいきよう

十悪五逆等の業は暗夜のごとし。華嚴経等の一切経は

やみよ ほし

ほけきよう やみよ つき

ほけきよう しん

闇夜の星のごとし。法華経は闇夜の月のごとし。法華経を信

ふか しん

もの

はんげつ

やみよ て

ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照らすがごと

ふか しん

もの

まんげつ

やみよ て

つきな

し。深く信ずる者は、満月の闇夜を照らすがごとし。月無く

ほし

あ

よ

ごうりき

もの

もの

してただ星のみ有る夜には、強力の者・かたましき者なん

ぎようふ

ろうこつ

もの

によにん

ぎようふ

かな

どは行歩すといえども、老骨の者・女人などは行歩に叶わ

まんげつ

とき

によにん

ろうこつ

ゆうえん

ず。満月の時は、女人・老骨なんども、あるいは遊宴のた

ひと

あ

ぎようふじざい

しよきよう

め、あるいは人に値わんがごとき、行歩自在なり。諸経に

ぼさつ

だいこんじよう

ぼんぷ

とくどう

にじよう

は、菩薩・大根性の凡夫はたとい得道なるとも、二乗・

ぼんぷ

あくにん

によにんないしまつだい

ろうこつ

けたい

むかい

ひとびと

凡夫・悪人・女人乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人々は、

おうじよう じようぶつふじよう

ほけきよう

にじよう

あくにん

によにん

往生・成仏不定なり。法華経はしからず。二乗・悪人・女人

とう

ほとけ

な

ぼさつ

だいこんじよう

ぼんぼ

等、なお仏に成る。いかにいわんや、菩薩・大根性の凡夫

つき

宵

あかつき

ひかり

はるなつ

をや。また月は、よいよりも暁は光まさり、春夏よりも

あきふゆ

ひかり

ほけきよう

しょうどうにせんねん

まつぼう

こと

秋冬は光あり。法華経は正像二千年よりも、末法には殊に

りしようあ

利生有るべし。

と

い

しょうもん

問うて云わく、証文いかん。

こた

い

どうりけんねん

うえ

つぎしも

もん

い

答えて云わく、道理顕然なり。その上、次下の文に云わ

われめつど

のち

のち

ごひやくさい

うち

えんぶだい

こうせん

るふ

く「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布し

だんぜつ

とううんぬん

きようもん

にせんねん

て、断絶せしむることなけん」等云々。この経文に、二千年

のち なんえんぶだい こうせんる ふ

そうろう だいさん

の後、南閻浮提に広宣流布すべしととかれて候は、第三の

つき たと こころ こころ こんぼんでんぎようだいし しゃく い

月の譬えの意なり。この意を根本伝教大師、釈して云わ

しょうぞう す お まっぼう ちか あ ほっけ

く「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華

いちじよう き いまさ とき とううんぬん しょうほうせんねん

一乗の機、今正しくこれその時なり」等云々。正法千年も、

ぞうほうせんねん ほけきよう りやく しょきよう すぐ

像法千年も、法華經の利益、諸經にこれ勝るべし。しかり

つき ひかり はるなつ しょうぞうにせんねん まっぼう

といえども、月の光の、春夏の正像二千年より、末法の

あきふゆ いた ひかり すぐ

秋冬に至って光の勝るるがごとし。

だいし たと ひ たと ほし なか つき い ほし

第四の譬えは日の譬えなり。星の中に月の出でたるは、星

ひかり つき ひかり すぐ ほし ひかり け

の光には月の光は勝るとも、いまだ星の光を消さず。

につちゆう

ほし ひかりき

つき ひかり うば

日中には星の光消ゆるのみにあらず、また月の光も奪つ

ひかり うしな

にぜん ほし

ほけきよう しやくもん つき

て光を失う。爾前は星のごとく、法華經の迹門は月のご

じゆりようほん

ひ

じゆりようほん とき しやくもん つき

とし、寿量品は日のごとし。寿量品の時は迹門の月いま

およ

にぜん ほし

よる ほし とき つき

だ及ばず。いかにいわんや爾前の星をや。夜は星の時・月の

とき しゆむ な

よる あ

かなら しゆむ な

にぜん しやくもん

時も衆務を作さず。夜曉けて必ず衆務を作す。爾前・迹門

しょうじ

はな がた

ほんもんじゆりようほん

いた

かなら しょうじ

はなお生死を離れ難し。本門寿量品に至つて必ず生死を

はな

よ ろつぴ

りやく

離るべし。余の六譬これを略す。

ほか

おお

たと

ほん

あ

なか

わた

この外にまた多くの譬えこの品に有り。その中に、「渡り

ふね え

たと

こころ

しょうじ

たいかい

に船を得たるがごとし」と。この譬えの意は、生死の大海

にぜん きよう

いかだ

しょうせん

しょうじ

には、爾前の経は、あるいは筏、あるいは小船なり。生死

ひがん

しょうじ

か きし

つ

しょうじ

たいかい

の此岸より生死の彼の岸には付くといえども、生死の大海

わた

ごくらく

ひがん

届

れい

せけん

しょうせん

を渡り、極楽の彼岸にはとずきがたし。例せば、世間の小船

とう

つくし

ばんどう

いた

かまくら

江

しま

等が筑紫より坂東に至り、鎌倉よりいの島なんどへとずけ

とうど

いた

からふね

かなら

にほんこく

しんたん

いた

ども、唐土へ至らず。唐船は必ず日本国より震旦国に至る

さわ

な

い

まず

たから

え

に障り無きなり。また云わく「貧しきに宝を得たるがごと

とううんぬん

にぜん

くに

ひんこく

にぜん

ひと

がき

し」等云々。爾前の国は貧国なり。爾前の人は餓鬼なり。

ほけきよう

たから

やま

ひと

と

ひと

法華経は宝の山なり。人は富める人なり。

と

い

にぜん

ひんこく

しょうもん

問うて云わく、爾前は貧国という証文いかん。

こた い じゆきほん い 答えて云わく、授記品に云わく「飢えたる国より来つて、

だいおう ぜん あ とううんぬん たちまちに大王の膳に値うがごとし」等云々。

によにん おうじよう じようぶつ だん 女人の往生・成仏の段。

きようもん い によらいめつ のち のち ごひやくさい うち 経文に云わく「もし如来滅して後、後の五百歳の中に、

によにん あ きようてん き せつ しゆぎよう もし女人有つて、この經典を聞いて、説のごとく修行せ

ば、ここにおいて命終して、即ち安樂世界の阿弥陀仏の

だいぼさつしゆ いによう じゆうしよ い れんげ なか ほうざ 大菩薩衆に囲遶せらるる住处に往つて、蓮華の中の宝座の

うえ しょう とううんぬん 上に生ず」等云々。

問うて曰わく、この経、この品に殊に女人の往生を説く。
何の故か有るや。

答えて曰わく、仏意測りがたし。この義、決し難きか。

ただし、一つの料簡を加え、女人は衆罪の根本、破国の
源なり。故に、内外典に多くこれを禁む。その中に、外典

をもつてこれを論ぜば、三従あり。三従と申すは、三つ

したがうというなり。一には幼にしては父母に従う。嫁し

ては夫に従う。老いては子に従う。この三障有つて世間

に自在ならず。内典をもつてこれを論ぜば、五障有り。五障

いち ろくどうりんね あいだ なんし だいぼんてんのう な

とは、一には六道輪回の間、男子のごとく大梵天王と作ら

に たいしやく な さん まおう な し てんりん

ず。二には帝釈と作らず。三には魔王と作らず。四には転輪

じようおう な ご つね ろくどう とど さんがい い

聖王と作らず。五には常に六道に留まつて三界を出でて

ほとけ な ちようにちみようざんまいきよう もん ごんじきによきよう い

仏に成らずへ超日明三昧経の文なり。銀色女経に云わ

さんぜ しょうつ まなこ だいち だらく ほうかい もろもろ

く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも、法界の諸の

によにん なが じようぶつ ご な とううんぬん

女人は永く成仏の期無し」等云々。

ぼんぷ けんおう しょうにん もうご 樊 於 期

ただし、凡夫すら賢王・聖人は妄語せず。はんよきとい

もの 荊 軻 くび 季 札 もう ひと じよくん

いし者は、けいかに頸をあたえ、きさつと申せし人は、徐君

つか つるぎ 懸 やくそく たが もうご な ゆえ

が塚に剣をかけたたりき。これ、約束を違えず、妄語無き故

なり。いかにいわんや、しょうもん 声聞・菩薩・仏をや。ぼさつ 仏は昔凡夫ほとけ

にましましし時、とき 小乗経を習い給いし時、しょうじょうきよう 五戒を受け始なら たま

め給いき。たまた 五戒の中の第四の不妄語の戒を固く持ち給いき。ごかい なか だいし ふもうご かい かた たま

財を奪われ命をほろぼされし時も、たから うば いのち 滅 とき かい この戒をやぶらず。だいじようきよう なら たま とき じゅうじゅうごんかい たま

大乘経を習い給いし時、じゅうじゅうごんかい なか だいし ふもうごかい たま かい また十重禁戒を持ち、その

十重禁戒の中の第四の不妄語戒を持ち給いき。かた たま むりようこう やぶ つい かい ちから この戒を

堅く持つて、無量劫これを破りたまわず。ぶっしん じよう さんじゅうにそう なか こうちようぜつそう え 終にこの戒の力

によって仏身を成じ、三十二相の中に広長舌相を得たま

えり。

この舌、したうすくひろくながし。薄あるいは面におおい、広あ

かみぎわ

至

ぼんてん

した うえ いつ

るいは髪際にいたり、あるいは梵天にいたる。舌の上に五つ

え いんもん

した いろ しやくどう

した

の画あり。印文のごとし。その舌の色は赤銅のごとし。舌

した ふた

たま

かんろ ゆじゆつ

ふもうごかい とく

いた

の下に二つの珠あり。甘露を涌出す。これ不妄語戒の徳の至

ほとけ

した

さんぜ しよぶつ おんまなこ

すところなり。仏この舌をもつて、「三世の諸仏の御眼を

だいち お

ほうかい によにん ほとけ

説

大地に墮とすとも、法界の女人は仏になるべからず」とと

いっさい

によにん

よ

ほとけ

成

たも

かれしかば、一切の女人はいかなる世にも仏にはならせ給

覚

そうら

によにん

おんみ

うまじきところおぼえて候え。さるにては、女人の御身を

う たま

后

三

后

くらい

備

受けさせ給いては、たといきさき・さんこうの位にそなわ

何

ぜんこん

ぶつじ

由 無

りてもなにかはすべき。善根・仏事をなしてもよしなしと

覺

そうら

ほけきよう

やくおうほん

によにん

こそおぼえ候え。しかるを、この法華經の藥王品に女人の

おうじよう

そうら

ふしぎ

そうろう

か

往生をゆるされ候いぬること、また不思議に候。彼の

きよう

もうご

きよう

もうご

いっぼう

もうご

經の妄語か、この經の妄語か、いかにも一方は妄語たる

いっぼうもうご

いちぶつ

にごん

しん

がた

べきか。もしまた一方妄語ならば、一仏に二言あり。信じ難

きことなり。

むりようぎきよう

しじゆうよねん

しんじつ

あらわ

ただし、無量義經の「四十余年にはいまだ眞実を顯さず、

ねはんぎよう

によらい

こもう

ことばな

しゆじよう

涅槃經の「如来には虚妄の言無しといえども、もし衆生、

こもう

せつ

よ

し

も

おも

虚妄の説に因ると知ろしめさば」の文をもつてこれを思わ

ほとけ によにん おうじよう じようぶつ

ば、仏は女人は往生・成仏すべからずと説かせ給いける

もうご き

みようほけきよう もん

せそん ほうひさ

は、妄語と聞こえたり。妙法華經の文に「世尊は法久しく

のち かなら まき しんじつ と

みようほけきようないしみな

して後、要ず当に眞實を説きたもうべし」「妙法華經乃至皆

しんじつ

もう もん

おも

によにん

これ眞實なり」と申す文をもつてこれを思うには、女人の

おうじよう じようぶつ けつじよう と

ほけきよう もん

じつご

往生・成仏は決定せりと説かるる法華經の文は、実語・

ふもうごかい み

不妄語戒と見えたり。

せけん けんじん

いちにん こ

ふしぎ

とき

世間の賢人も、ただ一人ある子が、不思議なる時、ある

とが あ とき なが こ

いは失有る時は、永く子たるべからざるの理、起請を書き、

せいごん た

つい みようじゆう とき のぞ

あるいは誓言を立つるとも、終の命終の時に臨んでこれ

ゆる

を許す。しかりといえども、

けんじん

賢人にあらずとは云わす。ま

もうご

もの

い

た妄語せし者とも云わす。

ほとけ

にぜんしじゆうよねん

あいだ

ぼさつ

仏もまたまたかくのごとし。爾前四十余年が間は、菩薩

とくどう

ぼんぷ

とくどう

ぜんにん

なんしとう

とくどう

ゆる

の得道、凡夫の得道、善人・男子等の得道は許すようなれ

にじよう

あくにん

によにん

とくどう

ゆる

ども、二乗・悪人・女人などの得道はこれを許されず。

ゆる

似

さだ

あるいはまた許さるるににたることもあり。いまだ定めが

ほとけ

せつきようしじゆうにねん

おんとししちじゆうに

たかりしを、仏の説教四十二年すでにすぎて御年七十二

まかだい こくおうしやじよう

ぎしやくつせん

もう

やま

ほけきよう

説

摩竭提国王舎城の耆舎崛山と申す山にして法華経をとか

たも

思

とき

むりようぎきよう

もう

きよう

と

たも

せ給うとおぼせし時、まず無量義経と申せし経を説かせ給

う。

無量義經の文に云わく「四十余年」云々。

むりようぎきよう

もん

い

しじゅうよねん

うんぬん